



社会学的身体論の批判的検討と エメルシオロジー

—パリ第五大学における身心変容技法の研究を経て—

関西学院大学
倉島哲

1

現在まで取り組んできたテーマ

- 主なフィールド
 - 京都の武術教室S流 (1999-2006)
 - マンチェスターのC太極拳センター (2006-2009)
 - 新郷の太極功夫CZ分会 (2006-2019)
 - 京都・大阪・神戸の推手交流会 (1997-2020)
- 同じ流派に属し、同じ指導者のもと、同じ教室の空間で、同じ技を習っているはずなのに、生徒一人ひとりなぜやっていることが違うのか？ (上手下手、先生と生徒の距離、身体の癖など)
- 異なった流派の相手とも勝負でき、勝負がつくのはなぜか？しかも、勝敗とは直接関係しない相手の上手下手がわかるのはなぜか？
- 流派や指導者などの観念的な同一性には回収されない身体を認めざるをえない
 - 一方で、観念的なカテゴリーでは尽くせないほどの特殊性を持つ
 - 他方で、観念的なカテゴリーを飛び越えてしまうほどの普遍的を持つ
- だとすれば、「身体技法の習得」という言い方は可能なのか？習得されるべき技法とは何か？上達とは？学習とは？教育とは？

2

S流の練習における先生と生徒の違い



3

推手交流会における上手と下手の違い



4

ベルナール・アンドリュウ教授との交流

- 2015年1月 身心変容技法研究会におけるアンドリュウ氏の発表 (2015年3月に論文化)
- 2016年6月 国際会議 Living body's experiences (パリ第五大学) で発表 (2020年にアレクサンドル氏・奥井氏の共編者で論文化の予定)
- 2017年11月 国際会議 Le devenir-cyborg du monde (ポルドー大学) で講演 (2018年12月に論文化)
- 2018年3月 日本スポーツ社会学会大会 (順天堂大学) にアンドリュウ氏をシンポジストとして招聘 (2018年12月に論文化)
- 2018年4月～19年3月 アンドリュウ氏の受け入れのもと、パリ第五大学の STAPS (体育・スポーツ活動における科学技術学部) で研修 (この間、アンドリュウ氏が来日し身心変容技法研究会シンポで発表)
- 2018年6月 国際会議 Body Week 3 (パリ第五大学) で発表
- 2019年12月 パリ第五大学 STAPS の創立90周年記念会議で発表

5

社会学とエメルシオロジー

- 武術の実践とは、「〇〇流の技を身につける」や「〇〇先生の指導を受ける」など、観念的な同一性によって捉えることはできない
 - 習得すべき技が明らかではないことによる暗中模索や試行錯誤
「どうして先生はあんなことができるのか？」
 - 生徒間における指導者の技の理解のしかたの多様性、身につけた技そのものの多様性
「どうしてこんな簡単なことができないのか？」
 - ある流派の技を身につけることで、他流派の相手とも勝負できるようになる
 - 流派が異なっても、相手の上手下手がある程度わかる
- しかし、社会学が関心を寄せるのは社会的な同一性の達成に貢献するかぎりでの身体の役割であるため、技を観念的な社会集団に結びつけてしまう
- 武術実践者としての対外的で表面的なアイデンティティは説明できないが・・・
- アンドリュウ氏のエメルシオロジーも取り込んだ研究の方向性

6

身体技法の概念の問題

- 日常的にも使われる言葉だが、もとはマルセル・モース (1934) が作った術語
- モースのいう身体技法とは、たんなる技法のことではなく、特定の社会集団 (民族・社会・下位集団など) が伝承してきた技法
 - 社会集団のアウトサイダーとしてのモースが、その集団の集合的な特徴として認識することができた身体の使い方を身体技法として概念化した
 - 集団を構成する当事者たちはみずからの身体の使い方を異化できない (=意識できない)
 - そのため、身体技法は最初から社会的かつ無意識的なものとして立ち現れる
- 身体技法は、デュルケムのいう社会的事実の二つの特性 (個人心理に対する外在性と拘束性) を備えている
- 身体技法は第一にアウトサイダー (社会学者) によって社会的事実として認識され、この認識の媒介を経てのみ、当事者はみずからの身体技法を認識できる
- 身体技法の自己認識とは、他者の視線を内面化であるといえるが、問題は、他者の視線が遠くからのものでぼやけていること

7

ハビトゥス概念の問題

- 身体技法の概念を精密化したのがピエール・ブルデュー (1977) のハビトゥス概念
- ハビトゥスの形成とは、社会的場にふさわしい振る舞いの生成能力を身体化すること
- ふさわしい振る舞い
 - = 場のテンポに適合した規則性と、即興的な戦略性を併せ持つ
 - ボクシング (ヴァカン、2004=2013)
 - サーキットトレーニング (Crossley, 2004)
 - ガラス吹き (O'Connor, 2007)
 - 各種の武術および格闘技 (Downey, 2005; Sanchez & Garcia, 2013)

8

ヴァカンのボクシング研究

- シカゴのボクシングジムに生徒として参加し、みずからリングに立った経験にもとづき詳しく記述する
- ボクサーになることは特定の傾向のセットを持つハビトゥスを身体化することであり、その傾向のひとつは「時間のなかの相手の動作に対する瞬間的な対応として、固定され相対的に限定された一揃いの動作の範囲内で創造すること」(Wacquant, 2004, 84, 邦訳141ページ)

9

「ボクサーの目」

- しかし、ヴァカンはハビトゥスの即興能力を、ボクシングのルールのもと行われるボクサーどうしの対戦（ジムの練習生どうしのスパarringとアマチュア公式戦）においてしか考察していない
- そのうえ、ヴァカンによれば、このような即興能力を備えたハビトゥスは、ボクシングジムにおいてのみ形成される
- ジムの空間にひしめきあうボクサーたちが一斉にトレーニングすることで集合的テンポが作り出され、ジムに参加した新人は、このテンポに無意識のうちに同調する
- そうすることで、新人はボクシングという社会的場に固有の認知様式、すなわち、相手の動作の前兆をいち早く察知する「ボクサーの目」(Wacquant, 2004, 117, 邦訳174頁)を身に付け、相手の動作に即応できるハビトゥスを身体化する

10

ボクサーはリングの外で戦えるか

- ボクシングという社会的場に固有のものとして捉え、その形成をジムにおける集合的テンポへの同調によって説明するかぎり、このハビトゥスにはボクサー相手の即興能力しか認めることができない
- それは、異なる流派や格闘技種目の相手のテンポに干渉し、その動作を挫くことのできる動作の即興能力ではない
- もちろん、現実のボクサーが、異なる流派や種目の相手を前にしたとき、相手の攻撃にまったく対応できないことは考えにくい
- 問題は、現実のボクサーの即興能力にあるのではなく、ヴァカンによるその捉え方
- 「朱に交われば赤くなる」式の、社会的場におけるハビトゥスの形成モデルとは異なる方法で上達を捉える必要がある

11

教育学における社会的場の枠組み

- 「朱に交われば赤くなる」式に、同一的な社会的場に定位して上達を捉えるのは、社会学だけではない
- 日本の教育学者の生田久美子(1987, 1995, 2011)は、日本舞踊の「わざ」の習得のためには、舞踊を伝承する共同体すなわち「わざ世界」に固有の「間」を身体化することが不可欠であることを示す
- アメリカの教育学者のジーン・レイヴとエティエンヌ・ウェンガー(1991=1993)は、西アフリカの仕立屋における徒弟制などを事例として、技能の学習が、社会的な生産活動の場である「実践共同体」に埋め込まれていることを示し、この共同体の周縁から中心に向かう漸進的な参加として学習を捉え直す

12

社会学場パラダイムの克服

- ・「朱に交われば赤くなる」ではなく・・・
 - ・朱に交わっても同じ赤にはならず、赤紫や青紫になった
 - ・朱に交わったと思ったら、実際は橙色に交わっていた
 - ・朱に交わったはずなのに、紺屋に褒められた
- ・克服せねばならないのは、
 - ・社会的通念としての「朱」
 - ・共同体の観念的伝統としての「朱」
 - ・遠くから見たときに、ぼやけて均一に見える「朱」
 - ・教え学ぶ具体的な身体から切り離された、非人称的な対象としての「朱」
 - ・身体がスポンジであるかのように、内部まで均一に浸透する「朱」
- ・まずは、「朱」という観念的カテゴリーには回収できない身体の内面的異質性（l'hétérogénéité du corps）に着目
- ・つぎに、異質な要素が持ちうる普遍性を考察

13

『世界のサイボーグ化』 2018年12月

倉島哲「身体の異質性：伝統太極拳に対するマルセル・モースのトランスカルチュラルリティの貢献」

Kurashima, A., L'hétérogénéité du corps : l'apport de la transculturalité de Marcel Mauss pour le tai chi traditionnel

・サイボーグ化される以前の、一見して自然な身体といえども、実際は異質性を内包している
 ・この異質性を、メルロ・ポンティとマルセル・モースの比較を通して検討したのち、伝統太極拳における素手武術と武器術の関係において検証する

(表紙：Stelarc, *The Third Hand*, 1980)



14

メルロ・ポンティに対する批判

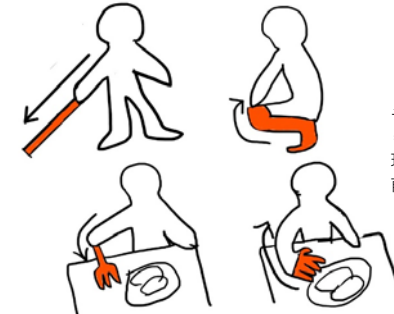
- ・リチャード・シュスターマンによる、「生きられた身体」の問題点の指摘
- ・「生きられた身体」の志向性は、意識の介入なしに、身体各部を効率的に協調させることができるとされているが、はたしてそうか
- ・肩こりや腰痛は、身体の非効率的な使用法すなわち「悪い癖」が沈殿し、自然化してしまっていることを示している
- ・自然化してしまった「悪い癖」を取り除くためには、アジアのヨガや瞑想、フェルデンクライスなどの「身体訓練体系(somatic disciplines)」が必要
- ・これらの訓練体系は、日常的には無意識的な身体の動作を、いったん意識化したのち、矯正し、ふたたび無意識化するというプロセスをとる
- ・だが、メルロ・ポンティは、「生きられた身体」がつねに意識の手前にあることで主観性を支えるという立場をとるため、身体を一時的・部分的に意識化することで、より効率的で快適な「生きられた身体」を獲得するための訓練体系の意義を認めることができない
- ・倉島の言葉でいえば、メルロ・ポンティの「生きられた身体」は、身体に内在する異質性(L'hétérogénéité du corps)を捨象してしまった

15

モースにおける身体の異質性

- ・メルロ・ポンティが道具による「生きられた身体」の延長を考察しているのに対し、モースの「身体技法論」は、「生きられた身体」が解体され、身体各部が異質なモノに変化する様子を描き出している

メルロ・ポンティの描く身体の拡張
 =外的対象物(道具)の習熟による身体化



モースの描く身体の短縮
 =身体部位の異質性の顕現によるモノ化(習熟以前の道具化)

16

しゃがむ技法における身体の異質性

- 幼児がしゃがむのは普通である。ところが、われわれはいまとなつては、しゃがむことができない。私はこれが、われわれの諸民族、諸文明、諸社会の愚かさであり、欠点だと信じている。一例を挙げよう。私は前線でオーストラリア兵（白人）と一緒に生活した。彼らには、私よりもかなり優れたところがひとつあった。われわれが泥や水のなかで休止する場合に、彼らは踵の上にしゃがみ込み、休息することができた。だから、われわれが当時そう呼んでいたところの「水」は、彼らの踵の下にあることになったのである。私の方は、足の全体を水につけて、長靴をはいて立ち続けなければならなかった。思うに、しゃがみ込む姿勢は子どもにはそのまま続けさせることのできる興味深い姿勢なのである。これを子どもから取り上げてしまうのはきわめて愚かな誤りである。われわれの社会以外では、全人類がそれを維持してきた。 [モース 1976: 136]

17

食べる技法における身体の異質性

- 食べること——みなさんはヘフディングが繰り返した述べたペルシャ王の逸話を覚えておられるに違いない。その王はナポレオン三世の招待を受け、指を用いて食事を摂ったのである。ナポレオンは金のフォークをお使いなさるがよいと王に勧めた。王はナポレオンに対して、「あなたはどんな楽しみを断とうとされているのかがお分りにならないのです」と答えている。 [モース 1976 : 150-151]

18

社会的意味を超出する身体部位と「生ける身体」のエメルジョン

- 整合的な全体としての人間は社会的意味に拘束されている（cf.ブルデューのハビトゥス、フーコーの従順な身体）が、異質な部位として解体された身体はこの拘束を超え出ることができる
- アンドリュウ氏の描くエメルジョンとは、「生ける身体」が意識の媒介を経ずに直接的に環境に順応(écologisation)すること
 - ・ アクロバットのパフォーマーが視覚野の外部の相手に手を伸ばす動作
 - ・ シールの輪(Roue Cyr)のパフォーマーが床との接触を避けて指を伸ばす動作
- これらの動作は、メルロ・ポンティの描く「生きられた身体」の統一性の外部にある
- そうであるなら、モースが示唆するように、これらの異質性を帯びた動作は、社会的意味を超え出る普遍性を持つのではないか

19

『スポーツ社会学研究』26 (2)

ベルナール・アンドリュウ、倉島哲「スペクタクルの背後の身体：サーカス・パフォーマーの生ける身体のエメルジョンを捉える」

Andrieu, B. and Kurashima, A., The Body Behind the Spectacle: Capturing Emersion of the Living Body of Circus Performers

- サーカスの観客が期待するのはスペクタクルとしてのシンボリックな身体であるが、パフォーマーたちは、「表象された身体」である以前に「生ける身体」である
- 「生ける身体」は、観客を前にしたパフォーマンスではなく、舞台裏の訓練においてこそ表れる
- 伝統武術は、パフォーマンスよりも訓練を重視しているため、「生ける身体」を捉えやすい



20

推手交流会というフィールド

- 「生ける身体」のエメルジオンを、社会的意味の支配するスペクタクルの舞台裏としてのみならず、社会的意味からのより積極的な超出として捉えたい
- 「生きられた身体」の統一性が解体され、身体部位が物質化されたとき、この物質性が社会的意味の殻を壊す様子を捉えたい
- 他流派の修行者とも勝負できる武術としての推手（すいしゅ）
 - 一般的にイメージされる太極拳の練習とは、型として決められた一連の動作を単独でゆっくりと行う練習、すなわち套路（とうろ）の練習
 - そのため、推手の練習風景は、いわゆる太極拳のイメージにはそぐわない
 - だが、套路を中心とする健康体操として世界的に普及する以前に、太極拳は中国において武術すなわち身体的闘争のための技法として発展してきた
 - 太極拳でもっとも重要な対人練習が推手

21

推手の特徴

- 套路の訓練が自分の身体をより効率的に用いることを可能にするのに対し、推手の訓練は、自分と相手の身体が作り出す関係性をより効率的に用いることを可能にする
- 刻々と変化する関係性のなかで、相手の動作を即興的に利用する能力を養成するために、推手は接触を重視する
- 推手の練習は文字通り「手合わせ」であり、双方が手首ないし腕を接触させることで開始され、その全体にわたって、身体どうしの接触を維持すべく双方ともに努める

22

大阪の推手交流会



23

相手に合わせて動くこと

- ほとんどの初心者は、相手に推されたとき、反射的に押し返してしまう
- この癖をなんとか押さえることができて、今度は反対に、相手の推す速度とは無関係にすばやく腕を引いてしまい、接点を離してしまう
- 必要なのは、一方的に推したり引いたりすることではなく、相手の動作を受けること
- しかし、受けるためには、たんなる受動性以上のものが必要
 - ただ腕の力を抜いただけでは、腕を自分の胸に推さえ付けられてしまうか、腕を落として肩からだらりとぶら下げることができない
 - 手首で知覚した圧力の変化を即座に腕の動作にフィードバックさせることで、力の抜き加減と動作の方向をたえず調整し続けねばならない
- したがって、相手に合わせた動作とは、一見して受動的な動作に見えて、実際は、高度にコントロールされた能動的な動作である
- 練習を積むと、具体的な動作を意識せずに接点が維持できるようになり、接点があたかも接着剤でくっついたかのような感覚になる

24

接点を維持することの利点

- 1) 接点を通して相手の動作を素早く正確に知覚できる
 - 接点で触覚的に知覚される圧力や摩擦のみならず、身体全体の感覚も重要な手がかり
 - たとえば、相手に腕を推されたときの圧力は、腕の皮膚表面で知覚されるのみならず、腕を支える全身の筋肉の抵抗感として感じられる。それに加えて、重心が後方に移動するにともない、左右の足裏で触覚的に知覚される変化もある
 - これらの手がかりを通して、目に見える動作として表現される以前の、相手の動作のかすかな前兆や、相手の身体のかみこわばり、相手の重心の位置などを知ることができるのである
- 2) 知覚された相手の動作に働きかけ利用することが容易になる
 - 身体とりわけ両腕は、相手の動作を知覚するためのセンサー（入力器）であると同時に、相手の動作に働きかけるためのアクチュエーター（出力器）でもある
 - 自分の腕が相手の腕に接触しているだけで、相手の腕を「チェックした」状態になり、相手の攻撃に応じた瞬間的な対応が可能になる
- 接点を通して、双方の「生ける身体」のエメルジオンが接触する

25

多様な身体に「揉まれる」こと

- 相手に合わせて動く能力は、相手に応じて発揮しやすかったりしにくかったりする
- この相違は、相手の修行している流派の特性に還元できず、相手の身体、性格、神経のありようをすべて総合した「生ける身体」に由来する
- 「生ける身体」どうしの相違が、推手という身体的コミュニケーションを通して、「生ける身体の個性」として知覚される
- 多様な個性の相手と手合わせすることで、自分の身体の弱点（動かない部分、鈍重な部分、狙われやすい部分）わかってくる
- このような身体部位の異化とは、社会的意味の枠内で安住していた「生きられた身体」の解体であり、「生ける身体」のエメルジオンである
- したがって、エメルジオンにも、勝ちに貢献する「良いエメルジオン」と負けをもたらす「悪いエメルジオン」がある
- 多様な個性を相手にすることで、弱点が様々な方法で狙われ、そのたびに少しずつ解消されてゆく→「身体が揉まれて柔らかくなる」イメージ

26

おわりに

- 日常生活でも、様々な相手と交際することで「世間慣れ」することや、様々な仕事の経験を積むことで「場数を踏む」ことがある
- これらの上達は、交際したすべての相手が共有しているハビトウスを身体化することでもなければ、達成したすべての仕事に必要なあった決定的な身体技法を習得することではないはず
- そうではなく、新たな相手と出会い、新たな仕事を成し遂げること更新され、さらなる高みを目指すことができるような上達
- したがって、身体は日常的に、意味を保証する社会的場を抜け出し、「生きられた身体」の統一性を解体するような「生ける身体」のエメルジオンを経験しているといえる
- このエメルジオンのレベルで他者と交流し、弱点として物質化した身体部位を「揉まれる」ことで、よりよいエメルジオンを目指すことができる

27